

明治大学教育会 講演会

テーマ 教育への〈想像力〉

—「教育保健学」というメガネで、子どもの教育＝保健現実を読み解く—

講師： 近藤 真庸（こんどう まさのぶ）先生
岐阜大学 地域科学部 地域文化学科 教授
同 大学院 地域科学研究科 教授

【概要】

キーワードは〈想像力〉。教師の〈想像力〉の欠如が、子どもの人権を侵害し、命を奪うことさえあります。今年7月に岐阜市の中学校で起こった「いじめ・自殺」事件はその典型的なものと言えるでしょう。

こうした現実を変革するための処方箋を求めて、私は、卒業論文以降、「教育保健学」という、教職科目にもない、“得体の知れない”学問を追究してきました。

《教育現実のなかに保健現実とそれを変えたいと願う教育要求を読みとり、保健学的分析を踏まえた教育学的考察をへて、変革のための実践的提言をおこなう》ことをめざす、私の「教育保健学」への関心は、小学3年生の自由研究にまで遡ることができます。

講演では、10歳からの55年間にわたる、私の「教育保健的」発想による実験的実践のなかから、「試して、なるほど！スッキリうんち」「大学区制を“越境”する！?」「津波防災マニュアル」「近藤ルール(ソフトボール)の発明発見物語」「いじめ・自殺事件への新しいアプローチを求めて」などの具体例を紹介しながら、教育への〈想像力〉がもつ意義と必要性についてお話するとともに、学生の〈想像力〉を鍛えることをねらった、大学で実践（「基礎ゼミ 教育学」）についても紹介したい、と思っています。

明治大学教育会研究大会 分科会概要

第1分科会

小規模校の現状 —教育現場の現在と課題—

阿部 光一 先生（宮城県丸森町立耕野小学校）

〔発表概要〕

少子高齢化に伴い、児童・生徒数が減少し、空き教室の増加、小・中学校の統廃合が進んでいる。

発表者の勤務する小学校は、児童7名、職員8名、複式学級2クラス、特別支援学級1クラスの小さな学校である。児童数が少ないために様々な工夫を凝らしながら教育活動を行っている。

発表では、学制発布から現在までの学校数、児童・生徒数の推移をたどりながら、現在校での特色ある教育活動の紹介、大規模校では味わうことができない充実感や達成感等、現場の様子を紹介するとともに、課題も明らかにしていきたい。

第2分科会

学業と部活動を高い次元で両立する

神川 明彦 先生（明治大学付属明治高等学校・中学校サッカー部総監督）

〔発表概要〕

2017年1月29日付で明治大学付属明治高等学校・中学校サッカー部総監督に就任以来、校訓や教育目標に沿った上での「学業と部活動の高い次元での文武両道」を求めてきた。顧問や保護者らの協力もあり、約2年で以下のような実績を積み上げることができた。

【高校】関東大会東京都予選ベスト16 ※創部最高成績

インターハイ東京都予選ベスト32 ※2年連続

全国高校サッカー選手権東京都予選ベスト32 ※2年連続

第7地区ユースリーグ優勝 ※上位カテゴリー初昇格決定

【中学】東京都新人大会ベスト16 ※創部最高成績

しかしながら、明大明治では、定められた成績レベルをクリアできない生徒に対して、定期試験2週間前から部活動停止措置を実行するなど、学校関係者、保護者、生徒らに「二者択一」の考え方が根強く残っているのが実情である。生徒が今後の人生を力強く生き抜いていくためには、様々な活動を同時並行で進めていく力が不可欠であり、そのためには「24時間をデザインする力」や「論理的考動力」を身につけることが必要である。

分科会においては、日々悪戦苦闘しながら文武両道に取り組んでいる実態を伝えるとともに、今後の文武両道の在り方について議論を進めていきたい。

第3分科会

公立学校で働いてこんなに魅力的！ 公立学校教員として働いて10年

高峯 祐一郎 先生（埼玉県立日高高等学校）

〔発表概要〕

県立高校で働くことの意義，自分自身がどう変化していったか。

「金八先生」は現代に存在するのか。これから教員を目指す後輩達や今一步教員への道を拓けずにいる若手や現役の大学生に何か少しでも役に立てればと思います。また，現在管理職やベテラン教員となっている諸先輩方へ中堅・若手はこんな事を考えています，といった話をしたいと思います。

教員採用試験のことや，実際に進学校ではない学校の現実と，そのような学校だからこそ魅力ある教員，魅力ある仕事である，という内容の話をしたいと考えております。

第4分科会

特色ある日本の学校

松浦 三郎 先生（一般社団法人学習評価研究所）

〔発表概要〕

1989年からはほぼ30年間，内外に特色ある学校探しの旅を続けています。ここでは，小・中・高校生徒数が100名程，日本で一番小さい私立学校「一燈園」（京都）の教育活動を紹介します。

一燈園は教育課程特例校，そしてユネスコ・スクールの一員として，祈りと汗と学習を軸に特色ある教育を実践しています。また英国からギャップイヤー学生を受け入れ，「ボランティア活動」や「心の教育」は国際的にも高く評価されています。2006年より，授業奉仕活動・「夏期学校・夏安居」を新たに立ち上げ，新しい教育の可能性を模索しています。

科学技術の革新的進歩は一方で，「人間とは何か」という問いを投げかけています。進化する学習環境の光と影の中で，ひとと人がつながりを作る場所として，改めて学校を見つめ直してみたいと思います。

第5分科会

日本人英語教員が非母語話者として英語を教えることとは

水倉 亮 先生（明治大学 国際連携機構）

〔発表概要〕

現行の学習指導要領における大幅な指導方針の変更が行われ10年が経とうとしている。政府主導による「グローバル化」推進事業や英語教育改革は，海外に展開する日系企業のグローバル化戦略を推し進めるために英語が不可欠であるという経済界からの要望に応え

る形で進められてきた。しかし一方で、中学生高校生の英語力が思うように伸びておらず、「4技能型」と謳って進められてきた大学入試改革も混乱を極めていることは多くの研究者および日本の大手メディアによって指摘されている。日本の英語教育改革の動向を社会言語学的視点から批判的に分析すると、日本社会における外国語としての英語の存在論的の解釈が不十分である点、そして世界の学術的議論との整合性においてさらなる議論の必要性が感じられる。

本発表では、まず国際英語論および非母語話者英語教員に関わる最新の研究を概観し、日本社会における外国語としての英語のあり方および非母語話者英語教員に関わる潜在的な英語教育の問題点について考える。また、日本人の英語に対する価値観が西洋文化への「憧れ」や「オリエンタリズム的劣等感」を生み出し、無意識のうちに母国語話者至上主義をもたらしている現状を説明する。最後に、世界情勢や日本の英語教育の動向を踏まえると、学習の目標は対母語話者を想定した英語コミュニケーション能力の育成と設定する場合、それは現実的とは言えないかもしれない。よって、今後の英語教育を見据えて、私たち非母語話者日本人英語教員はどのような英語をどのような形で教えるべきなのかについて議論していく。

第6分科会 学校教育における日本とドイツのハイブリット

和辻 龍 先生（都内私立中高一貫校）

〔発表概要〕

私は明治大学大学院理工学研究科を修了し、2014年3月まで東京の私立学校に勤務した後、ドイツへ渡航して2017年3月までの3年間ニーダーザクセン州に滞在しました。在独中、日本の学校制度でいう小学校5年生から高校3年生までの生徒が通う学校である、「ギムナジウム」で、突如現れた転入生として学校生活を送りました。

生徒として中学1年生のクラスに帯同し、生徒と共に、数学、理科、社会、体育に至るまで全ての授業に出席しました。その中で、授業内の「なぜ？」という問いかけに対する意思表示を大切にし、他者の発言に対しては敬意を持って耳を傾け、時には反論するドイツ教育を目の当たりにしました。例えば、体育のバスケットでは、チェストパスとワンハンドプッシュパスの有用性についてディスカッションしました。このように、ニーダーザクセン州が重視している、「自ら熟考」して、「存分に議論」する授業を研鑽しました。

このような経験から、帰国後の教員生活では、決められたテーマについて自分だけの発想でオリジナルの答えを記す期末試験や、実際の素材を使って架空のテーマについて自分だけの答えを導き出す発表形式の授業など、自由な発想で「思考力」と「自己表現力」を育む試験や授業を展開しています。

一連の、ドイツの学校教育の長所、日本の学校教育に取り入れる挑戦、その取り組みの様子と成果を明らかにします。

第7分科会

若手教員と語る学校のリアル

山下 達也 先生（明治大学文学部）

〔発表概要〕

若手教員たちはそれぞれが勤務する学校でどのような経験をしているのだろうか。

本分科会では、中高で働く若手教員をパネリストとして迎え、彼／彼女らの日々の教育活動の様子（授業，生徒指導，部活，保護者や同僚教員たちとの関わり，直面している課題等）を紹介してもらうことに加え，教員という職業についての考えをうかがう。

報告後にはフロアからの質問や意見に沿って全体で議論する